

新曲浦島

長唄

詞章

〔一部省略〕

坪内逍遙 作

杵屋六左衛門・杵屋勘五郎 節付

〔大薩摩〕 寄せ返す神代ながらの浪の音、たよりの世遠きしるべかな

それ渤海の東、いく億万里、底ひも知られぬ壑あるを、名づけて帰墟といふとかや

八紘九野の水尽し、空に溢るる天の川、流れの限り注げども、無増無減と唐土の聖人が寓言、

今こゝに見る目もはるけき大海原

北を望めば渺々と、水や空なる沖つ浪、けぶるみどりの蒼茫と（この後、

沖の帆影から蓬萊の島々に及ぶ数句は、原本の判読が困難なため省く）

〔三下り〕 日のうらら秋さびて、磯辺に寄する轟浪、岩くだけで散る水の白く、旦に洗ふ高麗の

岸、夕陽もそこに夜の殿、錦繡のとばり暮れ行く中空に、誰が釣舟の玻璃のもしび

裾の紫色あせて又、染めかへる空もやう、時の間よ一ツ星、雲の袖のほころび見せて、

斑ぐもり、しづ心なき風雲や

海人の小舟のとりかぢも、帰りをいそぐ櫓拍子に、〔唄〕 雨よ降れ降れ、風なら吹くな、家の

主爺は舟子ぢや

吹きまぜる船唄に、かりがねの一声も乱れて、浦の門は岩波さわぐ夕あらし、

すさまじかりける風情なり